

教科横断的な学習の実践（英語科・商業科）

クラス：普通科3年B・C組

指導者：畠山陽子（英語）

Johann BOTHA（英語）

三浦憲二（商業）

【目的】

- ・2020年に東京五輪をむかえ、本県においても外個人労働者の受け入れが増加することが予想されるなか、社会人1年生としてグローバルなコミュニケーションがこれまで以上に必要となってくる。このことを受けて、異文化におけるビジネスマナーを学び、これまで学んだ英語力を生かし、主体的・協働的に課題を解決することができる。
- ・入国審査という具体的な使用場面を設定して、自分のことを相手に伝えるように応答することができる。
- ・会話の即興的な話題に対応できる。

【内容】

入社試験のため訪米し、入国審査の後、訪問先の受付で要件を伝え、担当者のいる部屋までの経路を聞き、担当者に自己紹介をする。（なお、受付では日本の文化についての質問もあり）

【科目および単元】

英語科

科目：コミュニケーション英語Ⅱ

単元：Enjoy Communication I 「What is the purpose of your visit?」

商業科

科目：ビジネス基礎

単元：ビジネスとコミュニケーション（※発展演習として）

【指導計画】

内 容	時間配分
国際的なビジネスマナー（商）	1時間
アメリカの入国審査（商）	1時間
ICT機器による情報収集（商）	2時間
英語の文章構成や音声的特徴の確認と練習（英）	2時間
ALTとのリハーサル（英）	1時間
フィードバック（商）（英）	1時間
実践演習（商）（英）	2時間
ベン図によるアクティブラーニングの事前学習（商）	1時間
『2か4』とベン図を活用したまとめ（商）	1時間



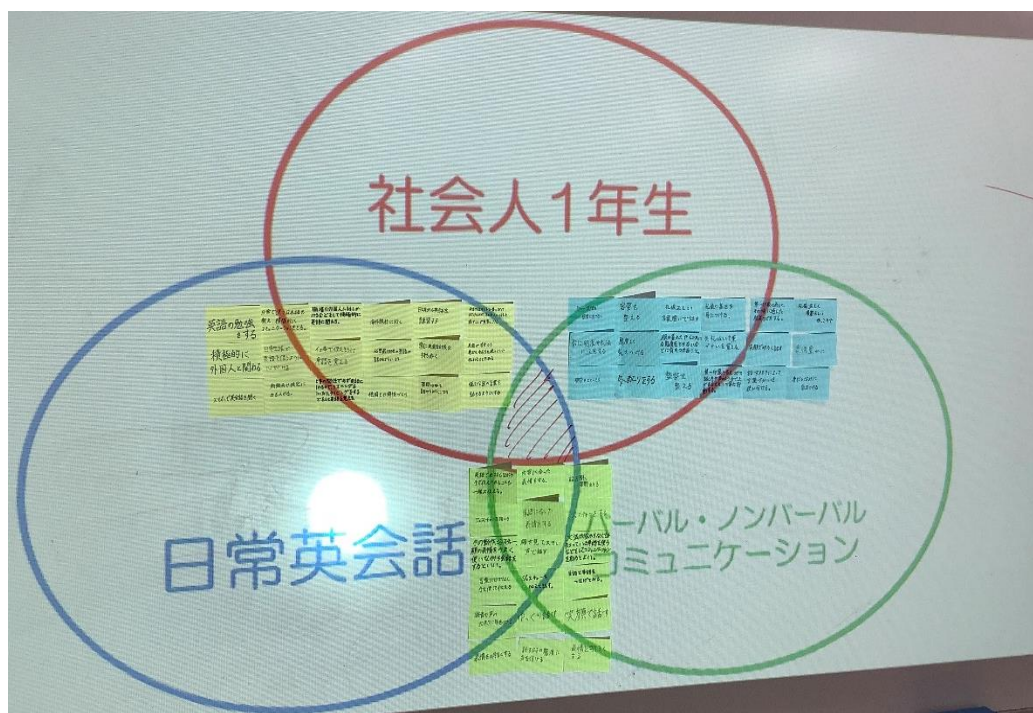
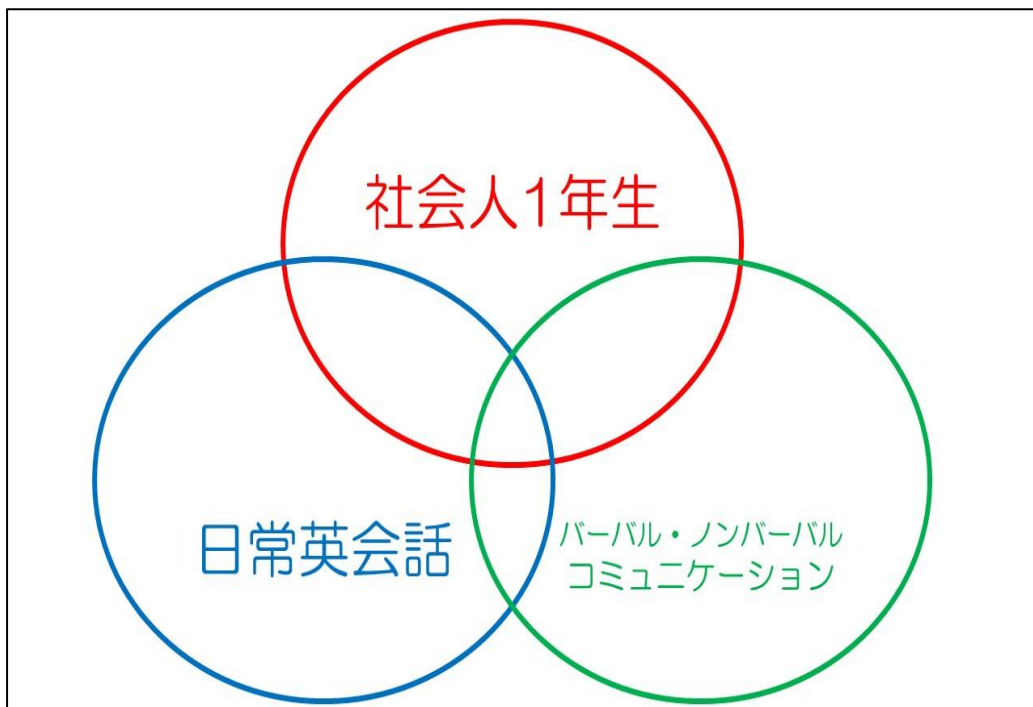
【まとめ】 テーマ：「グローバル化で生きる社会人としてのコミュニケーション」

本校では、研究主題である『他者とのかかわりで気づいたことを、自らの言葉で表現する授業』を
実践するために、「アイコンタクト：i Con (sider) t (+) Act (ion)」を活用し、「にかふおー：2
か4」による協働的な学習活動を取り入れた授業改善を行っている。

まとめのテーマに関しては、11月21日には外務省の高校講座、「新しい時代の外国との関係と日
本（人）の役割」について講演を受けたこともふまえて決定した。

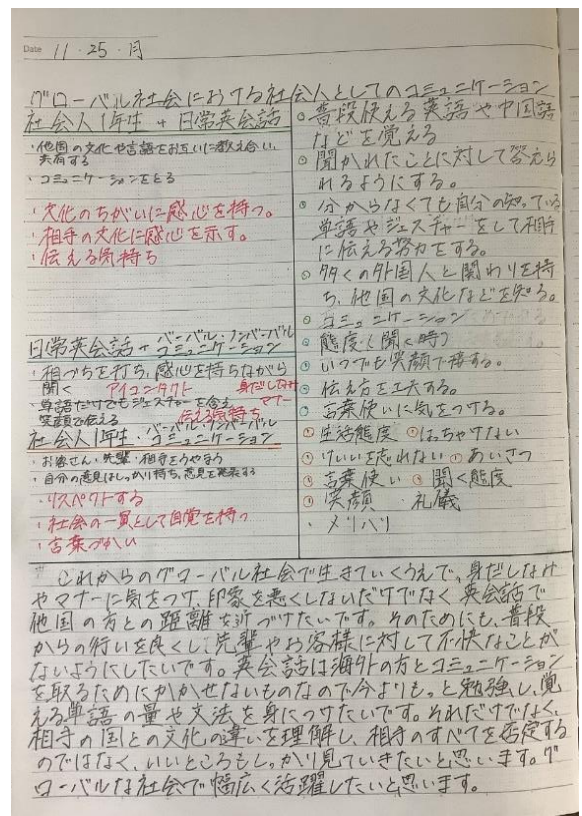
【活動内容】

「社会人1年生」・「日常英会話」・「バーバルコミュニケーション・ノンバーバルコミュニケーション」
を関連付けるためにベン図を利用して、各自の意見を「2か4」によってまとめ、投影したベン図に
付箋を貼り、全員の共有し自分の言葉で考えをまとめる。なお、自分の意見と他者の意見が分かるよ
うにノートを活用する。





ノートの構成	
タイトル	
日常会話 社会人1年生 日常英会話 パーバールコミュニケーション ノンバールコミュニケーション 社会人1年生 パーバールコミュニケーション ノンバールコミュニケーション	各自の考え 他者とのかわり 気づいたことは 余白に色ペンで記入
まとめ	



生徒によるまとめ

- ・自分の意見をしっかりと持ち、堂々と意見を発表する。
- ・国内外、高校生や社会人に関わらず第一印象は大切なので容姿を整える。
- ・人と話す際には、アイコンタクトをする。
- ・傾聴することが相手を敬う気持ちとなるので大切。
- ・高校生の気分のままでなく社会人としての自覚を持ち、会社の一員であるという責任を持つ。
- ・言葉だけではなく、異文化に興味を持つ。その前に日本の文化を学ぶ。
- ・文法よりも単語だけでも伝えるという気持ちが大事。
- ・今まで英語はテストに書くだけだったけど、今後は社会人として話すことが大事になる。
- ・社会人になっても手帳を持ち歩き、メモをする習慣をつけて学ぶ姿勢でいる。

担当者のコメント

〈英語科 教諭 畠山陽子〉

就職試験を行う会社のインフォメーションでの会話を担当した。”How may I help you?”(ご用件は何ですか)と尋ねると、生徒たちは大変緊張した様子で話し始めた。一通りアポイントメントの内容や時刻等を確認した後に、日本の若者の間で流行していることや、スポーツ、お祭り、秋田県の位置など、様々なことを質問した。すると生徒たちは、質問を理解することや受け答えに四苦八苦しながらも、英語で何とか会話を続け、自然と笑顔になり、会話を楽しむことができていた。英語は得意・不得意の差が大きい教科であるが、自分の知っている英単語やジェスチャーを駆使したり、絵を書いて説明するなど、一生懸命に自分の言いたいことを英語で表現した今回の経験は、生徒たちの今後の英語学習に対するモチベーションを高めることにつながった。商業科と連携したことで、生徒たちはビジネス実務で学習した知識と、実際にビジネスの場面で必要とされる英語の表現を融合して学ぶことができ、それらを実践することができるたいへん良い機会となった。

〈英語科 ALT Johann BOTHA〉

The world is becoming increasingly connected as companies look to expand their business. All high school graduates need to be prepared to communicate and travel internationally, and including immigration and international business communication roleplays are a good way to introduce students to situations they could potentially encounter in the workplace. It gives students an opportunity to experience English outside the traditional English lessons and therefore they can become more comfortable with the language. In my opinion, an important step in Japanese students learning English is the realization that English is more than just a subject at school and experiences like this allow for that.

企業が販路を拡大しようとしている中、世界はますます密接につながっています。高校卒業後、生徒は国の枠を超えて飛びまわって、意思疎通を図ることになり、それに備える必要があります。その意味で入国審査や国の枠を超えたビジネスコミュニケーションの役割練習を授業に取り入れることは良い方法です。今の高校生が職場でいずれ出会うであろう状況を経験させることができます。従来行われてきた英語の授業にとらわれない生の英語を経験する機会になります。そうすることで英語に身構えることなく気軽に対応できると思います。英語を学習する日本人にとって重要なステップは、英語は学校での教科の一つではないことを理解することだと思います。今回のような経験がその理解の一助になります。 【訳：英語科 教諭 菅原英明】

〈商業科 臨時講師 三浦憲二〉

昨年度に引き続き、英語科との教科横断的な学習を実施し、今年度はベン図を活用して「2か4」でまとめるようにしてみた。その結果、今年度本校のキーワードとなった「アイコンタクト」、またそこから生まれる傾聴姿勢の大切さなどが生徒の心に残っていること、外務省の高校講座で学んだ「相手の国の言葉で話すことがリスペクト」という考えなど、生徒は授業だけではなく学校生活全般を通じて学んでいることを再認識できた。

教科横断的な学習を通じて、生徒が多くの側面から事象を捉えて思考し、他人の考え方も取り入れて自分の意見を確立していくことは、本校の研究主題に沿うものであり、またビジネス基礎の「円滑にコミュニケーションを図り、ビジネスの諸活動に適切に対応する能力と態度を育てる」というねらいも達成できるものだと考え、来年度以降も実施していきたい。